

桃山茶陶と近代陶芸の研究 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	西田 周平
発行年	2021-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第840号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024684

[30]

氏名	にしだ しゅうへい 西田 周平
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第71号
学位授与の日付	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	桃山茶陶と近代陶芸の研究
論文審査委員	主査教授 篠原 啓方 副査教授 藤田 高夫 副査教授 二階堂 善弘 専門審査委員 名誉教授 中谷 伸生

論文内容の要旨

西田周平氏の博士論文「桃山茶陶と近代陶芸の研究」は、侘び茶が確立した桃山時代の茶陶の成立と展開、そして近代以降、一度は忘れ去られた桃山茶陶の復興を試みた陶芸家とその作品を分析し、彼らの作陶が持つ現代的意義について論じたものである。本論文の構成は、以下の通りである。

序論

第一章 室町時代における書院の茶と新たな喫茶の登場

第一節 書院台子の茶と民間における喫茶

第二節 会所における喫茶

第三節 「ケ」の空間における喫茶

小結

図版

第二章 桃山時代における製陶の状況—美濃と薩摩を中心に—

第一節 侘び茶における高麗茶碗・和物茶碗の登場

第二節 美濃窯の成立と展開

第三節 初期薩摩焼にみられる大陸陶磁器の影響

小結

図版

第三章 近代における桃山復興運動について

第一節 近代における桃山復興運動勃興の背景

第二節 古志野陶片の発見と桃山古陶に対する再評価

第三節 荒川豊蔵による桃山復興

第四節 加藤唐九郎による桃山復興

第五節 数寄者川喜田半泥子による桃山復興

小結

図版

第四章 桃山復興運動のその後

第一節 鈴木蔵による現代的な志野への挑戦

第二節 長春天山と穴窯の可能性

小結

図版

結論

関連年表および年譜

図版出典

主要参考文献一覧

第一章では、室町時代における上流階級の歌会や「闘茶」に見られる喫茶が桃山時代の侘び茶へと移行していく過程において、部屋の中央に囲炉裏を設けた空間における喫茶が存在し、これが村田珠光らの侘び茶における茶室の原型となった可能性があることを指摘した。

第二章では、16世紀の後半、それまで最上位・最下位とされた茶陶の価値観が逆転したことを背景に、新たに登場した日本独自のやきもの、すなわち独特の釉色や器形の作為的な歪みが強調された茶陶が、美濃をはじめ全国の窯で生産されていく過程を論じている。特に美濃と唐津、そして薩摩で焼かれた作品や窯跡の調査報告に基づき、遠く離れた地域に見られる窯や作陶技術の共通性から、全国規模の陶工・技術の交流がなされていたことは確実であり、こと薩摩においては、千利休や古田織部といった著名な茶人の指導がなされた可能性もあると想定した。

第三章では、昭和初期の古美術市場に登場した陶磁の名品に関心が高まる中、美濃で見つかった志野の陶片を機に起こった桃山茶陶の復興運動と、茶陶の復元を試みた3人の作陶に対する姿勢と作品を分析した。荒川豊蔵と加藤唐九郎は、失われた技法の復元と作品の模倣から出発したが、やがて独自の「志野」を生み出すに至ったとする。一方、荒川豊蔵にも影響を与えた川喜田半泥子の作陶は、趣味性の強いものであったが、創意あふれる作品を多く出した。その背景には「桃山志野の本質は技法や形よりも、桃山茶陶から感じられる自由奔放さ、茶の湯に裏打ちされた美意識といった精神面にこそある」という彼の思いがあったとする。総じて、陶芸家にとっての昭和とは「個性や自由な心を持つことで芸術的なやきも

のを誕生させられることに気づかせられた時代」であったと評価した。

第四章では、昭和初期の復興運動以降も、桃山古陶に挑み続ける2人の陶芸家を取り上げた。鈴木蔵（1934～）はガス窯を使用して管理体制や効率を向上させ、現代的な志野を生み出したのに対し、長春天山（1949～）は伝統的な穴窯と桃山時代の焼成法を用い、窯変による偶然性をも作品に取り込もうとする。2人の作風は対照的でありながら、現代にふさわしい新たな作品が誕生する可能性を示しており、その功績は高く評価されるとする。

結論として、日本やきもの史における桃山茶陶の価値と重要性は、近代以降の陶芸家に受け継がれ、様々な創意工夫によって着実に現代的かつ個性的な作品を生み出しているとする。

論文審査結果の要旨

本論文の特色としてまず挙げられるのは、桃山茶陶を桃山時代のやきものとして取り上げるだけでなく、桃山茶陶の価値を世に知らしめた近代の復興運動との関係から論じた第三章、第四章である。先行研究に、木田拓也氏の「昭和の桃山復興：陶芸の近代、伝統の創出」（博士論文、早稲田大学、2012）があるが、作品の分析に力点が置かれていない。また個々の作品分析は、展覧会の図録にも見られるが、桃山茶陶の復興という視点から多数の陶芸家の作品を扱ったものはほぼない。本論文は、復興にかかわる昭和初期～現在の陶芸家らの作品を数多く分析し、それらを桃山茶陶と対比させ、境遇を異にする彼らがいかにして桃山古陶に興味を持ち、作品から何を学びとり、作陶の過程で生じた問題をいかに克服したのか、そして復興（作品）の持つ現代的な意義とは何か、などを丹念に追っている。このような試みは従来なかった新しいものであり、高く評価される。

また前述の木田論文は、復興運動の一翼を担ったとされる多くの陶芸家に言及しているが、加藤唐九郎にはほぼ触れなかった。加藤唐九郎は贋作事件の首謀者であり評価の分かれる人物であるが、桃山復興運動における彼の位置は重要であり、西田氏は彼を取り上げることによって、復興運動や陶芸における昭和という時代的意義に、厚みを持たせている。さらに鈴木蔵、長春天山という存命中の陶芸家の作品を、桃山茶陶の復興と関連づけて分析・評価したのも、西田氏が初めてである。

一方、第一章は、桃山茶陶の成立に深い影響を与えた侘び茶の茶室の起源に触れたもので、絵画に登場する何気ない囲炉裏の風景に茶室の原型を読み取ろうとした点は注目される。第二章は、桃山茶陶の全国的展開を美濃と薩摩の交流から論じたもので、特に薩摩側の文献や窯の発掘成果を詳細に分析し、以前から多彩な舶来陶磁を目にすることのできた薩摩が、美濃の茶陶にいち早く注目し、その技術を取り入れたとする指摘は重要である。

問題点としては、まず桃山茶陶と近代陶芸の間にある近世の位置づけが挙げられる。江戸

時代には、桃山茶陶の製作技術が失伝し、作品も忘れられてしまったため、近世と桃山茶陶を直接結びつけることは難しいが、論文の構成にさらなる工夫が必要である。もう一つは、桃山復興運動の背景についてである。西田氏はその契機として志野の陶片の発見を挙げるが、復興運動の重要性に鑑みれば、美術界の動向や社会の思潮といった大きな背景にも触れておくべきであろう。このような課題は残るものの、西田氏が本論文において上げた学術的成果は高く評価される。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。